

新琴似農村歌舞伎と若松館

新琴似歌舞伎伝承会事務局長 みやざき 宮崎 よし はる 義晴

1874年（明治7年）に制定された屯田兵制度によって、1887年（明治20）年5月に九州（佐賀県、福岡県、熊本県など）から146人の屯田兵が入植し、開拓の鋤を入れたのが、新琴似地域の始まりです。

屯田兵の役割は、北方の防御と入植地域の開墾が主たる目的であり、日々、訓練の合間を開墾に従事するという、大切な任務と労働でありました。しかし、明治も後半になると明治維新後の世相も安泰をたどり、屯田兵制度は廃止され、一般の方々も多く北海道へ移住するようになりました。田中

長次郎・チチ一家が長男松次郎を伴い、鳥取県から札幌へ移住したのもこの時期です。数年後、両親が農業に従事するため新琴似に移り、松次郎も成長とともに両親を助け農業を手伝うこととなりました。



田中松次郎

しかし、生まれながらに芸能への関心が強かった松次郎は、農業を手伝う傍ら、農閑期を活用し地域の若者を募り、素人芝居劇団を結成して地域のお祭りなどで上演するようになりました。この素人芝居劇団が新琴似農村歌舞伎の発祥です。

当時は、どの地域でも娯楽に乏しく、素人劇団が上演する芝居は大変な人気を得ました。新琴似

のみならず遠くまでもその名声と活躍が知られ、上演のお声が掛かるほどでした。団員も徐々に増え人気も高まるにつれて、どうしても自分の劇場を持ちたいという情熱が高まり、松次郎は私財を投じて現在の北区新琴似7条1丁目に倉庫を改築した木造平屋の長屋風劇場を建築しました。劇場の名称は、松次郎の名前から一字を取って、若松館と名付けられました。なお、警察への劇場の開設願いは、1910年（明治43）年12月に提出され、翌年にはこけら落としが行われました。

若松館は、当時としては立派な劇場で収容人員310人。舞台を始め、花道も設け、警察詰席、楽屋、トイレも併設し、観客席は土間にむしろを敷いて観劇しました。入場料は一切無料、観客の花（投げ銭）で運営を賄っていました。それゆえに、役者と観客はとても身近な間柄であったようです。このように新琴似での農村歌舞伎は、地元の人たちへ安らぎと活気を与えてくれました。

時代が明治から大正へと移るに至り、近代文明が著しく発展しました。中でも映画が出現したことにより、人々の気持ちが伝統的な文化から離れ、新しいものへと移行していきました。歌舞伎もその影響を受け、自然と衰退の運命をたどり、1916年（大正5）年に新琴似農村歌舞伎は、その活動に幕を降ろしました。若松館もともに終焉しゅうえんしましたが、その役割は立派に果たされたと思います。当時の環境の中で、若松館が村人に与えた影響は、単なる歌舞伎小屋としての役割のみではなく、日々の重労働をいやす館、社交の館、情報提供の館などとして幅広く、充分にその責務を全うしたこと

と思います。

ぜひ、皆さんには「北区歴史と文化の八十八選」にも選ばれた「新琴似歌舞伎の跡地（新琴似7条1丁目）」の案内板の前に立って、若松館と田中松次郎たちの情熱に思いを巡らせていただきたいと思います。

新琴似歌舞伎伝承会は、1996年（平成8年）3月2日に地元住民の情熱の下、紆余曲折と試行錯誤の中で新琴似農村歌舞伎復活公演を成功させ、現在も新琴似歌舞伎を後世に伝承すべく活動にまい進している幸いです。



1996年「新琴似歌舞伎復活公演」での「白浪五人男」の一場面

幸いにも毎年、新琴似屯田兵中隊本部保存会と連携して、地元の中学生を対象に歌舞伎公開講座を実施しています、中学生の郷土に対する関心や伝統文化への理解を深め、この大切な伝統芸能が途絶えることのないよう、日々努力を重ねているところです。



2006年 新琴似歌舞伎伝承会復活公演10周年記念公演
「仮名手本忠臣蔵」



2008年の歌舞伎公開講座